

酒屋忠僕

野村胡堂

一

「親分、平右衛門町の忠義酒屋というのを御存じですかえ」

「名前は聞いているが、店は知らないよ」

ガラッ八の八五郎は何んかまた事件を嗅ぎ出して来た様子です。大きな小鼻をふくらませて、懷ろから出した掌^てで、長んがいの顎^{あご}を撫で回しながら、こんな調子で始めるのでした。

薄寒い日射しが障子に這い上がって、街にはもう暮近い賑やさか脈打っているというある日の出来事です。

「孝行や忠義はこち、らに縁はないが——」

「何んという罰^{ばち}の当たった口を利くんだ、馬鹿野郎。搔払いや巾着切を追っ駈けるばかりが能じゃあるめえ、たまには御褒美の出る口でも聴^{ききこ}込んで来い」

「へエ、せいぜい心掛けますがね、——差当り平右衛門町の忠義酒屋加島屋の話で——」

銭形平次の馬鹿野郎を喰いつけている八五郎は、臆^{おく}した色もなく話をつづけるのでした。尤も小言^{もつと}をいいながらも平次は、粉煙草の烟^{けむ}を輪に吹きながら、天下泰平の表情で、八五郎の話を享樂しているのです。

「加島屋が暮の大売出しでも始めるといふのか」

「そんな世間並な話じゃありません。が、親分はあの忠義酒屋の因縁^{いんねん}を御存じですか」

「いや、知らないよ。お前には小言をいったものの、俺なんかも

忠義や孝行とは縁のない人間かも知れないな」

「尤もお静姐さんは、町内で評判の亭主孝行——」

「馬鹿野郎、亭主の前で女房を褒める奴があるか」

「へエッ」

八五郎は月代さかやきを撫で上げて、ペロリと舌を出しました。平次の恋女房のお静は、何んにも知らずに、お勝手を明るくさせながら、嗜みたしなよくお化粧をしております。

「無駄は抜きにして、忠義酒屋の加島屋が一体どうしたと言うんだ」

平次は際限なくタガのゆるむ話を、もとの話題に引戻しました。

「へッ、相済みません。——その加島屋の娘——一人ありますがね、姉はお咲と言って二十歳、妹はお駒といって十八、姉のお咲は咲き立ての牡丹ぼたんのような、良い女ですが、妹のお駒は見つともない娘で——同じ枝に咲いた花が、あんなに違っていたら見世物でしょうが、人間の姉妹だから大した不思議とも思わない——」

「今日はどうかしているぜ八、お前の言うことは一々かん疳にさわるが」

「相済みません。——悪る気じゃないんで、勘弁して下さい。——ところでその娘が昨日わざわざあつしのところへ来たとしたらどんなもので、へッ、へッ」

「嫌な奴だね、姉の方か、妹の方か」

「姉の方だと申分ないんだが、妹の方でしたよ」

「不足らしい事を言うな、新造しんぞがせっかく訪ねて行ったんだ」

「そう思って、精いっぱいお愛想をしましたよ」

「用事は？——まさか八五郎を口説くどきに行ったわけじゃあるめえ」

話はだいぶ面白くなりそうで、平次もツイ乗出しました。

「船の支度が出来て、両国の下に舫もやったのは辰刻いつつ（八時）少し過ぎ、結構な短冊に下手つ糞な歌などを書いていると、お料理やお燗の世話をしているお咲の頭の上へ、薪割まきわりが一挺、凄い勢いで落ちて来たというじゃありませんか」

「怪我は？」

「幸い薪割は少しはずれて、お咲の肩をかすって水の中へ落ちました。それツと船の中の者が立ち上がりましたが、両国の橋架らんまの欄間もやに舫もやった船から、橋の上が見える道理はありません」

「薪割はどこのだ」

「水の中へ落込んで、この寒空じゃ捜しようはありません。尤も加島屋の物置にあった筈の古い薪割が一挺なくなっていたそうで」

「その時刻に店を出た者はないのか」

「多勢の奉公人で、誰が外へ出たか、はっきりは判りません。唯、これだけは言えますよ、番頭の清兵衛は帳場を動かなかったし、手代の喜三郎——この男は忠義酒屋の綽名あだなの主で、江戸中でも評判になった心掛の良い男ですが、その騒ぎの最中にちょうど船へ弁当を運んで来たそうですから、この二人にだけは疑いが掛らなかったわけです——喜三郎は船へ来るとひどく腹を立てて裸になって大川へ飛込んで薪割を捜すと言い出して皆んなに留められたそうです」

「曲者は加島屋の家の者に違いあるまい。が、こいつはむずかしいな」

平次も腕を組みました。これだけの事件では、銭形平次が乗出

すわけにも行きません。

二

「ところで、その忠義酒屋の因縁をお前は知っているだろうな」
平次は妙なことを訊きました。

「知ってますよ。神田から浅草へかけて知らないものはありやしません」

「ところが、口惜しいが俺は知らない。神田っ子の名折になるといけないから、筋だけでも通してくれ」

「お安い御用で、三味線抜きでやりましょうか、ヘッ」

「馬鹿だなア、氣取ったって木戸銭は出ないよ」

「平右衛門町の酒屋、加島屋の子飼の手代で喜三郎。こいつが大の忠義者で、お内儀さんが患らった時は観音様へ暁方のお百度詣りをしたとか、寒中に水垢離を取ったという話もありましたが、それほどの信心でも定命に勝てなかったものか、お内儀さんは二年前に亡くなりました」

「それっきりか」

「まだありますよ。この春は主人の金兵衛が傷寒を患らって、危ないと言われましたが、喜三郎はその枕元に付きっきりで、六十日のあいだ帯も解かなかったそうですよ」

「フーム、大した辛棒だな」

「主人はその看病のお蔭で病気が癒って、お礼心に百両という金をやったが、喜三郎は涙を流して受取らなかったということで――それでは主人の命を百両という金に代えたように気が済まない

から——というんだそうです」

「なるほど」

「あんまり心掛が良いので、平右衛門町小町と言われた、娘のお咲の聲むこにして、加島屋の跡取にしようとしたが、これも辞退をして受けなかったそうで、——それというのは、喜三郎は江戸一番の心掛の良い男だが、あばたで、見る蔭もない醜男ぶおとこです。こんな見つともない者と一緒になったら、お嬢さんはきつと長い間あいだに嫌になるだろうというんだそうで——罰の当たった野郎じゃありませんか、鏡と相談して縁談を断わるなんて、男のすることじゃありませんね」

「お前とは少しばかり心掛が違うようだ、——それにしても少し遠慮が過ぎるね」

「あんまり心掛けの良いのも氣障きざですね。ともかく、喜三郎の人氣は大変なものですよ、近所ばかりでなく、神田、下谷、浅草へかけて、忠義酒屋と言えば知らないものはありやしません」

八五郎が斯んな話を持って来てから四五日経ちました。暮の氣分の忙しさに紛まぎれて、ツイ『忠義酒屋』の話を忘れるともなく忘れていると、

「親分、とうとうやられましたよ」

八五郎はいつもの平次の不精をとがめるような調子で飛込で来ました。

「何がやられたんだ」

「お咲ですよ」

「えッ」

「平右衛門町の小町娘をローズ物にしゃがって癪しゃくにさわるじゃ

ありませんか」

八五郎の報告はいつになく穏かでした。——大変ッ——の旋風^{せんふう}を吹かせて飛込む元氣もなかったのでしょうか。

「行つて見よう、八」

「あんな娘を殺すような野郎は、一日も放つちや置けません。——昨日もあつしが様子を見に行くと、——八五郎親分御苦労様、本当に恩に着ますよ、お茶が入りましたから、どうぞ——つて、小菊に包んで落雁^{らくがん}を五つ——」

「泣くなよ八、大の男が天道様に照らされて泣くのは見つともよくないぜ」

「でも、口惜しいじゃありませんか、親分」

そんな事を言いながら、二人は平右衛門町に急ぎました。まさか八五郎は泣きもしなかったでしょうが、ひどくがっかりして居たことは事実です。

三

加島屋の騒ぎは、全く上を下へという形容詞^{けいようし}の通りでした。

ガラッ八の注進が早かったので、平次が行った時はまだ土地の御用聞も来ず、お咲の殺された現場も手付かずで、平次流の観察や調べ事にはこの上もなく誂^{あつら}え向です。

主人にも、店の者にも挨拶を交す隙もなく、八五郎に案内さして平次はいきなり現場に飛込みました。

店からは遠く、母屋^{おもや}の一部には相違ありませんが、南向の一番端つこの六畳がお咲の部屋で、その手前が妹のお駒の部屋、それ

から婢^{おんな}どもの部屋、この三つの部屋が境の戸で仕切られて、それから手前へ廊下続きに番頭や手代や若い男たちの部屋が店近く列んでおります。

「これは」

障子を開けてたった一と眼、物別れた平次もさすがに唸^{うな}りました。それほどお咲の死は凄惨で、それほど痛々しかったのです。床から拔出し加減に、小町娘の怨^{うらみ}に燃える眼は、天井の一角を見詰めております。顔は少し脹^はれて、美しさはひどく損ねましたが、喉笛を圧^おされた死骸は、ひどい苦悶の跡を留めるにしても、生れ付きの美しさに救われて、そんなに醜^{みにく}いものではありません。多分下手人はお咲の布団の上に馬乗りになって、両手の恐ろしい力で、この造化の大傑作とも言うべき美しい娘を扼殺したのでしよう。白い円い首筋に、印された恐ろしい指の跡が、曲者の図太さと、その凶暴さをまざまざと語っているのです。

有明の行燈の下で、美しい眼一パイに溢れた苦悶と、怨の視線を浴びながら、この娘を殺す人間の冷たさ虐^{むじ}たらしさを、平次は腹の底から憎くならずにはおられません。

「これほどの事に、誰も気が付かなかったのだな」

「今朝、下女のお秋が雨戸を開けに来て気がついたそうです」
側から応えたのは八五郎でした。

「銭形の親分さん、あんまりひどい殺しようで、私は腹わたが煮えくり返るようです。なんとか早く下手人を縛って下さい。――

申しおくれましたが、私は主人の金兵衛でございます」

月代の光沢^{つや}の良い五十二三の中老人は、平次の前に頭を下げました。

「お気の毒だね。こんな娘を——」

平次はそう言いながら、片手拝みに死骸から離れました。寝巻や布団の贅は、町人には少し奢りの沙汰おこと思われるほどで、主人金兵衛の溺愛振りが思いやられます。

「ところで——」

平次は四方を見廻しながら続けました。幸いそこには暫らく人が絶えて、奉公人たちは遙かにこの座を避けた様子です。

「——こんな事を訊いても無駄かも知れないが、家の中で殺された娘を怨む者はなかったかな」

「怨む者なんかあるわけはありません。娘は誰へも一樣に親切にしておりました」

その誰へも一樣に親切にしたことが、案外若くて美しい娘に取っては命とりの原因だったかも知れません。

「少し立ち入った事を訊くようだが、ことに親しくしていた者は——」

「それもなかったと思います。最も聳になりたい者は多勢ございました」

「例えば」

「外では日本橋の佐渡屋の若旦那、浪人の染井五郎様、伊豆屋の弟御」

「店の者では？」

「手代の国松、安五郎などで——二人とも人を頼んで養子になりたいという申入れがありました。私も娘も不承知で断わりました」

「喜三郎というのがいるそうだが——」

「あれは感心な男で、私から娘の聲にと望みましたが、——お嬢さんの氣に染む筈はないから——とはつきり断りました」

主人金兵衛の、喜三郎に対する信用は宏大でした。

「戸締りは？」

平次は縁側に立って、冬枯^{ふゆが}れの小さい庭を眺めやりました。

「私は用心深い方で、戸締りは一々自分で見廻りますが、決して手落や間違いはなかった筈でございます。今朝下女のお秋が開けた時も、少しも変ったところはなかったそうで」

「あの庭じゃ外からは足跡をつけずに入られませんよ」

ガラッ八の八五郎は、霜解^{しもどけ}のひどい庭を指しました。それに昨夜は暖^{こお}かで凍^{こお}らなかったで、下手人が外から来たとすれば、足跡を残さずには近づけなかったでしょう。

平次は部屋を出て、縁側^{ぎやう}を逆に店の方へ戻って見ました。お咲を殺したのは、明かに男の強い掌の力ですが、この屋根の下に寝ているのは主人の外に国松、安五郎、喜三郎の若い男たちと、五十男の番頭の清兵衛だけで、主人と清兵衛を除けば、国松、安五郎、喜三郎の三人に限定されることになります。

四

縁側の尽きるところで、平次はハタと当惑しました。

「この戸は？」

「女どもの部屋と若い男たちの部屋とを分けるために、夜分はその戸を締めておきます」

「締めるのは誰の役目で」

「締めるのも、開けるのも、お秋の役目でございます」

「するとこの戸から此方には、二人のお嬢さんと——」

「下女が二人、お秋とお竹が寝んでおります。飯炊きのお定はお勝手の隣りに寝ておりますから」

「そのお秋とお竹を呼んで貰おうか、一人ずつ」

平次の声に応ずるように、店の方から来たのは十五六の小柄な娘でした。

「あれがお秋で」

平次は黙ってうなずきながら、

「昨夜この戸が開いていた筈だな、お秋」

いかにもそれは唐突とうとつでしたが、一言の弁解も許さぬ態度です。

「でも、お竹さんが、自分で締めるからと、たって言いましたから」

主人の顔を盗み視ながら、お秋の声は蚊の鳴くように小さくなります。

「そんな事はときどきあるのか」

「いえ、五日に一度、十日に一度ぐらい」

「誰さそを誘い入れるんだ」

「私は——」

ハッと赤くなって、モジモジしているお秋を、この上追及しても駄目と見たか、

「お竹を呼んでくれ、——今のことは黙っているんだよ」

「ハイ」

お秋は虎口ここうをのがれでもしたように、店の方へ引返します。

「あの、私に御用だそうで——」

入れ換って来たのは二十二三の大年増ですが、商人の家の奉公人にしてはひどく厚化粧で、物言う毎に少し歪めて白い齒をチロリと見せる唇は、やや下品ではあるが媚をさえ含んで、なかなか美人でした。

「ときどき夜中にお前のところへ忍んで来るのは誰だ」

「え？」

「白ばっくれるな、種は皆んな挙がっているぞ」

「でも、お嬢さんの部屋へは参りません」

「そりゃ当り前だ、お前と逢引した男だけは、間違ひもなくお嬢さん殺しの下手人ではなかった筈だ」

「――」

「安五郎か、国松か、それとも喜三郎か」

「まさか」

お竹はひどく喜三郎を輕蔑している様子です。

「喜三郎はそんな男じゃない、――やはり国松か安五郎だろう」

「――」

「お前が言わなきや、二人とも縛って、つれて行く外はない、後で怨まれても知らないよ」

「申し上げますよ、親分」

「誰だ」

「安五郎さんで――まア極りが悪い」

お竹は袖で自分の顔を隠して、バタバタと店の方へ帰りました。

「ところで八、その縁側がよく鳴るようだな」

平次は縁側ばかり歩いている八五郎に声を掛けました。

「まるで鶯張りだ、この縁側をそつと歩くには忍術の心得が要る

ね」

ガラッ八はよく鳴る縁側を歩きながら、そんなことを言っております。

「陽が入るので、板が詰まってしまいましたよ」

金兵衛は苦笑いしております。

「斯うなると、殺された死骸があつて、下手人がないということになりそうですね」

それはまったく八五郎の言う通りでした。

つづいて平次は母屋おもやに寝んでいる三人の若い男にも逢つて見ることにしました。合図一つすると、ガラッ八がつれて来たのは加島屋を有名にした忠義者の喜三郎です。

「お前は喜三郎というんだね」

「へエ」

黒あばたで思い切つて醜みにくい男ですが、その代り物柔ものやわらかで腰が低くて、丈夫そうで、典型的な頼母しい奉公人です。

「昨夜なにか気の付いたことはなかったか」

「何んにも存じません。私はよく寝る方でへエ」

「お前の評判は大層なものだが、お咲の躰になるのまで断わつたのは、遠慮が過ぎはしないか」

「御尤でもございますが、私はこの通りで、若くて綺麗な女とは縁がございません。親の威光いこうで一緒にされても、後でイヤなことが起るのは眼に見えております」

「そんなものかな、其処まではこちとらは考えられないが——ところで、何が望みでお前は働いているんだ」

「望みと申しまして——御主人への御恩返しの外には考えても

見ません。それにゆくゆくは暖簾のれんを分けて下さると仰おほしやいますので、小さい店でも持った時のために少しずつは貯たくわえもふやし、商売の駄引も見習って置きたいと存じます」

「お前は幾つなんだ」

「二十五で御座います」

「厄やぐだな、ところで、ゆくゆく店でも持つとして、いくら位溜溜つたんだ」

「へエ——」

「何百両とか言うんだろう」

「飛んでもない親分、せいぜい三十両位のものでございます」

「幾才から奉公しているんだ」

「十三の春からでございます」

「十三年の間に三十両か」

「へエ——」

平次はこの驚く可き奉公人を黙って見詰みづめる外はありませんでした。

五

次に逢ったのは安五郎でした。

「お前はゆうべお竹に逢っていたそうだな」

「へエ——」

安五郎はこの一言ですっかり菱気しよげてしまいました。三十前後の背の高い男で、喜三郎に比べると男振りは見事ですが、その代り気の廻りも鈍にぶく、遊び心だけは相当に猛烈らしく見えます。

「お竹とは前から馴染なじんでいるのか」

「へエ——この春からでございます」

「境の戸はお竹が開けてくれるんだろう」

「へエ——」

「お前の外に誰か女部屋の方へ入ったものはなかったのか」

「一向気が付きませんが」

この上何を訊いても、この男から引出せそうもありません。

最後に逢ったのは国松という手代でした。色の浅黒い、キリリとした男で、二十七というにしては少し老けておりますが、何ん
となく油断のない面構えで、逢って話していると、妙に強したたかな感
じを与えます。

「お前はここへ奉公して幾年になるんだ」

「今年で十五年になります」

「何が望みだ」

「——」

この平次の問いには、国松もさすがに驚いた様子です。

「その男は、私の死んだ女房の遠縁で、格別眼をかけております
が」

見兼ねた様子でそつと囁いたのは主人の金兵衛でした。

「養子にでもするつもりで？」

「いや、飛んだ口強馬こわうまで、私の手には合いませんよ」

主人と平次は囁き交します。

それを小耳に挟んだのでしよう、国松の眼はキラリと光りまし
た。

「お咲を殺した下手人の心当りはないのか」

平次は改めて国松に訊きました。

「私にわかるわけはありませんよ」

お前は十手捕縄を預っていてわからないじゃないか——と言った調子です。

平次はこれ以上追及する気もないらしく、案外手軽に帰してしまいました。

「あの野郎が一番変じゃありませんか、親分」

八五郎はその頑かたくな感じのする後ろ姿を見ながら、唾つばでも吐きたいような調子です。

「御主人、奉公人たちの持物を調べたいが、構わないでしような」

「へエヘエどうぞ御自由ときに」

平次はそれから一刻ときばかり、国松、喜三郎、安五郎を始め、お秋、お竹などの荷物を念入りに調べました。

一番金を持っていたのはお竹で、これは三十両余り、一番少ないのは喜三郎、三十両の貯蓄たくわえは主人に預けてあるそうで、自分の手にはほんの二分か一両だけ。国松は十両余り。安五郎は五両そこそこで、その代り変てこな字でなすくった恋文が一と束、代々の女中に渡りをつけて居たことがわかって、すっかり主人を怒らせてしまいました。

「親分、喜三郎の部屋の押入に、ひどく汚れた着物が入っておりますよ」

「どれどれこいつは寝巻じゃないか、寝巻に乾いた土と媒埃すすほこりを用意うんと付けているのは変だね」

平次は万筋の地味な寝巻を念入りに調べて居ましたが、それっ切りもとの押入に返させました。

「人間一人確かに殺されているんだから、どこか忍び込む道があるんだろう。——ところで一度俺は両国へ行つて見ようと思うが」
「へエ」

「お駒を誘い出してくれ。一緒につれて行つて訊きたいことがある」

ガラッハは飛んで行きましたが、まもなく妹娘のお駒をつれて来ました。姉のお咲とは似もつかぬ不きりょうですが、色が黒くて愛嬌あいぎょうもあつて、健康そうで利発者で、何んともなく好感の持てる娘です。

「昨夜氣の付いたことはないか、——例えば縁側を誰か通つた——と言つた」

「いえ、私はたいへんに寝坊で」

お駒はそう言つて赤い顔をするのです。昼のうちよく働くせいでしよう。

「ところで、喜三郎はお前の姉さんのことを何んとも思つてはいなかつたのか」

「思つて居ましたよ、可哀想にあの人はあんな様子ですから、それを口に出しては言えなかつたんです」

「姉さんの方は」

「ひどく嫌つていました。喜三郎の噂をすると顔色を変えたほどで」

「国松の方は」

「一時姉さんの聲にという話もあつたようですが、姉さんが嫌いでそれっきり話は立消えになつたようです」

「国松は姉さんを怨うらんでいるだろう」

「さア――」

十八娘のお駒に取っては、これ位のことを言うのが精いっぱい
の様子です。

三人はいつの間にやら両国に来ておりました。

平次は船を一艘出させて、八五郎とお駒を乗せていつぞやの雪
見船のいた場所に繋^{つな}がせ、自分は橋の上からしばらく様子を見て
おりましたが、予^{かね}て用意した石を二人のいる船の側へ投げると、
大急ぎで橋の袂を廻^かって、船へやって来ました。

「どうだ、八」

「待っているとずいぶん手間取りますね、煙草二三服というところ
ですよ」

「ところで、あの日、薪割^{まきわり}を投^なってから、喜三郎が雪見船へ来る
までの間はどれくらいかかっているんだ」

平次は改めてお駒に訊きました。

「すぐでしたよ、こんなにはかかりません。薪割^{まきわり}が姉さんの肩を
かすって水へ落ちたので、総立ちになって大騒ぎをしたのと、喜
三郎どんが重箱^{しよ}を背負^{しょ}って船へ飛込んだのと一緒でした。喜三郎
どんは、まだブクブク泡の立っている水を眺めて、裸^{はだか}になって飛
込んで、それを拾って来ると言い出したんです」

お駒の観察は行届いて居りました。が、橋の上から船へは、平
次が試みたより早く来る方法はありません。

「喜三郎じゃないな」

「――」

「だが、もう一つ術^てがある。来い八」

「へエー」

三人はまた大急ぎに平右衛門町に引返しました。

六

「八、お前は家中の者を見張っていてくれ。逃げ出す奴があったら縛っても構わないよ」

「へエー、親分は？」

「少しかっこうは悪いが天井へ潜り込むよ——提灯を借りて来てくれ」

「まだ昼前ですよ」

平次は提灯に灯を入れると、いきなりお咲の部屋の押入に潜り込みました。

「布団がなくなると、出入りが自由だ。時々やったと見えて、ろくに埃も落ちないよ」

平次は押入の上の板を動かして居りましたが、動くのを一枚見付けると、簡単に天井裏に潜り込んでしまいました。

そこへ入って見ると、案外どこからともなく明りが射すので、眼が馴れると提灯にも及びません。

音のしないように梁を伝わって行くと、媒埃の中に道は自然に付いて、二た間、二間先へ平次を導いてくれます。

それはこの上もなく不思議な探険でした。が、下の縁側から曲者が入った形跡がないとすれば、縁の下と天井裏の外に通路はありません。

縁の下はこの場合問題でなく、天井裏と気が付くと、平次はすぐその探険に取かったままでのことです。

「私じゃない、人、人違いだ。私じゃありません」
物狂わしく最後の抵抗をつづける喜三郎を、ともかくも二人がかりで押えて、一と間につれ込みました。

それが何んと、忠義酒屋の看板で奉公人の亀鑑きかんのように思われていた、喜三郎の絶望と屈辱くつじよくに歪む恐ろしい顔ではありませんか。

「野郎ッ、逃げる気かッ」
廊下では八五郎が、ドタリバタリと組討の真っ最中です。

梁はりの上から見定めて、部屋部屋の押入の上のあたりを見ると、重しの石の動いているのや、埃ほこりのないのがよくわかります。此処ぞと思うところの裏板を上げて、そっと押入に降りて見ると、



「喜三郎、見つともないぞ、観念して皆んな話せ。お咲を殺したのは誰だ、お前は、知っている筈だ、——言わなきゃお前が下手人だ」

「——」

「いや、俺はお前が下手人だと言って居るわけではない、——知ってることを皆んな話して見ろ」

平次の調子には、妙に涙を含んだようなしんみりしたところがあります。

「親分」

「どうだ、喜三郎、少しは気が静まったか」

「親分、私は口惜しい」

荒れ狂っていた喜三郎が、急に静かになると、サメザメと泣き始めました。

「何が口惜しいんだ、言ってみろ」

「親分、私は忠義者なんかじゃありません」

「それも解っている、お前は主人と相談づくで、忠義の芝居をしていたのだろう。加島屋の店の評判をよくするために」

「親分——」

恐ろしい明察の前に、喜三郎は首を垂れました。

「百度詣りも寒垢離も、皆んな芝居に違いあるまい、——お前は私の顔をまともに見ることも出来なかった——」

「親分さん、私は気が弱かったのです、主人にそう言われると、気に染まないことでも否とは申せませんでした。帯を解かずに六十日、主人の介抱したと言うのも大嘘で、私と旦那は毎晩玉子酒を拵えて楽しんでおりました」

「斯うなればもう、皆んな申上げてしまします。百両の礼金を辞退したというのも嘘、最初からそんな金なんか見たこともありません。お嬢さんの聳を辞退したというのも嘘、——何も彼も嘘で固めたことで、旦那もお嬢さんもそんな事を承知する筈ありません」

それは恐ろしい告白こくはくでした。お咲殺しの疑いから免れようともがいた喜三郎は、自分の潔白を示すのに急で、胸の中に蟠わたかまっていた長いあいだの鬱屈うっくつを、一ペンに吐き出してしまったのです。「忠義酒屋の評判が高くなって、店は繁昌するし、私は飛んだ人氣者になり、往來を歩いてさえ人様に指を差されるようになりましたが、私の身になると、斯こんなイヤなことはありませんでした。『忠義酒屋の喜三郎』——何んという嫌な名でしょう、私はそう言われる度に嘔氣はきけがするほど胸が悪くなりました。その上お嬢さんは、チンチンやお預けをするように、私をからかっちゃ独りで面白がっております」

「口惜しいと思っても、私はどうすることもできません。そのうちフト天井裏伝いに、お嬢様の部屋の押入へ行けることに気が付き、毎晩あの押入まで忍んで行つては、せめてお嬢様の寝顔を見るのを楽しみにしておりました。恥かしいことですが、忠義者にされて猿芝居さるしばいの猿のように暮している私に取つては、それが人知れぬ気ままな楽しみでございました」

哀れな忠義者は、苛酷かこくな運命と強い意志とに引摺ひきずられながら、こんな異常な楽しみに、僅かに自分の生活を見出して居たので

しよう。

「ところで昨夜はどんな事があった」

平次はようやく問題の重点に入りました。

「私がお嬢様の部屋の押入にいますとき、誰か廊下を歩く音がしました。安五郎どんが、お竹と外の廊下へ出た後です。私は旦那が見廻りに来たのかと思って、びっくりして押入から天井に這い上がりましたが、しばらく経ってもひっそりしているのもう一度押入へ戻って見ると――」

「暫くというど、どれほど経ってからだ」

「四半刻（三十分）くらいだったと思います――すると」

喜三郎はゴクリと固唾^{かたず}を呑みながら続けました。

「――部屋の中にはお嬢さん一人で、誰も見えませんでした。少し床から抜出して、変なかつこうだなとは思いましたが、あの時まさかお嬢さんが死んで居ようとは思いません――それっ切り私は自分の部屋へ帰ってしまいました」

喜三郎がここまで話して来ると、

「八、解ったよ」

「誰です下手人は」

「もう一つ聴きたい、近ごろこの家へ養子が来ることになっている筈だろう」

平次は妙な事を訊ねます。

「へエ、日本橋の佐渡屋の若旦那が、三千両の持参金で乗込む筈でございます」

「その前は養子の口がなかったのか」

「私が辞退した事になっていたので、遠縁の国松どんが、養子

になるだろうと言われておりました、本人もその気だったようです」
下手人の輪郭が次第にはっきりして来ました。

「もう一つ——雪見船を出した日、お前した後か先かに店を出た者はなかったのか」

「国松どんが私の後から店を出たようです」

喜三郎の話が終ると一緒に、

「親分」

ガラッ八はもう立上がっております。

×

×

お咲殺しの下手人は、手代てだいの国松でした。これは八五郎の手で召捕られて、まもなく処刑されましたが、『忠義酒屋』の加島屋は、忠義が人気取の芝居とわかって、江戸っ子の反感はんかんを買い、悪評の中に見る見る没落して行きました。

数年の後忠義者の猿芝居を打った喜三郎は、醜みにくいが人柄の良いい駒と夫婦になって、僅かに加島屋の店を保たもつて行ったということです。

その当座、平次は八五郎の問うがままに、こんな調子に説明してくれました。

「喜三郎は気が弱かったが、悪人じゃない。悪いのは主人の金兵衛と、国松だよ。雪見船に薪割まきわりを投ったのは、喜三郎のせいにしてようと思ったらしいが、少し早過ぎたので、かえって喜三郎の無実の証拠になったのさ」

「へエーなるほどね」

「喜三郎が押入から天井裏へ出て、お咲の部屋へ行くのを、国松は感付いたのさ。安五郎とお竹が逢引あいびきしている僅かの隙にお咲の

部屋に忍び込んで、あんな虐^{むじ}たらしいことをし、それから喜三郎の寝巻を土埃^{つちぼこり}と煤^{すす}で汚しておいたんだろう。ところが天井裏は思いのほか綺麗で、あんなに着物が汚れる筈はなかったんだ」

「――」

「国松は利巧者で、つまらない細工の好きな方だったが、それでも悪い奴は器用な細工をすればするほど尻尾を出すことになるんだね。――だが忠義の猿芝居は嫌だったな。商人の人気取も、あすこまで行けばアクが強過ぎて笑えない」

平次はつくづくそう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和二十一年十二月号 文藝春秋新社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部